

学級全員が演じる人権劇の取り組み

3年A組担任 森口 健司

今年度も昨年度に引き続き人権劇『水平社バンザイ～「橋のない川」を題材として～』に取り組んだ。昨年度の3年B組の生徒たちの取り組みを土台として、3年A組の生徒たちはひたむきに精一杯の劇を演じてくれた。文化祭の日、卒業生（昨年度人権劇に取り組んだ生徒）も何人か会場にいた。「先生、1年前を思い出す」と声をかけてくれる生徒、「昨年以上にパワーアップした感じがする」と話してくれる生徒。何といても3年A組の生徒の頑張りが、卒業生に「高校でも頑張ってください」とエールを贈っているように思えてうれしかった。

文化祭の劇は、まさしく昨年以上の迫力と感動があった。それは昨年取り組みが土台となって生まれた迫力であり、感動であったと思う。ここにも継続した取り組みの大切さを思う。この文化祭での取り組みを12月7日の板野町解放文化祭での部落問題講演会に先立って行なわれる生徒発表の場でも公開するようになった。

期末テスト明けということで、わずかな時間しか練習することができなかったが、生徒一人一人がやる気になって取り組んだときのエネルギーというのはこれ程までにすごいものなのかと思わされる劇となった。全員参加のシナリオと劇を終えた後の感想のいくつかをまとめておきたい。

※

演劇『水平社ばんざい』 ～「橋のない川」を題材として～ シナリオ

私たち3年A組は、この劇を真剣に演ずるところから、差別解消をめざしていきたい。

※

配役	畑中孝二（小学校時代）	河野 顕慶		
	民吉（小学校時代）	長尾 大地	松波貞夫（小学校時代）	宮本 雅史
	青島先生	野崎 慎吾		
	松崎豊太（小学校時代）	井上 哲夫		
	畑中孝二	西村 信哉		
	民吉	園藤 篤志	松波貞夫	小川 俊紀
	佐山	松長 輝	和尚	坂東 一史
	番台（男）	吉田 将悟	番台（女）	平野 ゆり子
	おふで	多田 昌代	おかね	手塚 寛子
	西光万吉	山本 武志	水平社の男①	佐藤 哲也
	水平社の男②	中村 剣	水平社の男③	佐野 慎哉
	平等会の男①	郡 友美	平等会の男②	村田 晋也
	靴職人	鈴木 辰哉		
	司会者	田尾 未来	会長	森川 史
	聴衆①（生徒①）	福原 三沙樹	聴衆②（生徒②）	山田 舞子
	聴衆③（生徒③）	寒川 由美子	聴衆④（生徒④）	矢野 晶子
	聴衆⑤（生徒⑤）	田村 美千代	聴衆⑥（生徒⑥）	寒川 智代
	聴衆⑦（生徒⑦）	小林 仁子	聴衆⑧（生徒⑧）	中川 敬子
	聴衆⑨（生徒⑨）	長尾 裕子	聴衆⑩（生徒⑩）	三藤 友紀
	ナレーション〈二人〉	①藤田 美里	②藤田 静	

※

ナレーション（BGM 解放歌）

① 私たちは今まで部落問題学習を一生懸命にやってきました。私たち3年A組は、5月に3年生全体の前で授業を公開し、全体学習に初めて取り組みました。その取り組みの中には、先輩

たちが築き上げてきた全体学習をしっかりと受け継ぎたいという願いがありました。昨年度の卒業式での答辞は、今も目を閉じると鮮やかに思い出されます。

- ② 学年、学校全体で取り組んだ同和問題学習。私たちはこの同和問題学習で涙を流しながら自らの想いを語る友と、差別の怒りに震えた友と共感し合い、支え合い、仲間の絆を深め合うことができました。「本音を語る」たったそれだけのことがどれほど苦しいことなのか。私たちはこの学校で、この体育館で初めて知りました。同和問題学習に取り組んでいたときの私は「輝いていた」と自信を持って言うことができます。私たち卒業生は、この差別と闘おうとする炎を、身体を熱くする炎を今、在校生の皆様には託します。
- ① 私たちはこの全体学習の取り組みをより確かなものにしていくために、先輩たちの意志を受け継いで行くためにも、人権劇『水平社ばんざい』に取り組みたいです。
- ② これから『水平社ばんざい』という劇を演じる中で、部落問題学習に取り組んでいる私たち3年の想いを一人でも多くの人に理解してもらえることを願って、これから一生懸命に演じようと思いますので、みなさんももう一度自分の生き方について、何が大切なのかをつかんでください。
- ① 私たち3年A組は、この劇を演ずることから差別解消を目指していきたいと思います。
- ② 場面は、畑中孝二たちの小学校時代、小学校5年生の教室、青島先生の授業で畑中孝二が『五箇条の御誓文』を暗唱しているところから始まります。

※

一 場 5年生の教室、青島先生の授業

孝二 「『一つ、旧来のろう習を破り天下公道に基づくべし。一つ、知識を世界に求め大いに皇基を振起すべし』」

青島 「よう出来た。他に五箇条の御誓文を暗唱できる者は？」

(教室を見回すが、だれも手を挙げない。)

青島 「みんな、あかんのう。畑中に負けとるやないか。さすがに畑中は明治維新のありがたさを一番よう知つとる。」

(くすくす笑い声が起る。)

青島 「明治の新政府になって、天皇陛下は、士・農・工・商の分けへだたりをなくして下さった。四民平等ということです。さらに、明治4年に、天皇陛下は『解放令』を出されて、畑中たちも平民の列に加えて下さった。その人たちは新しく平民になったから『新平民』です。」

(松崎豊太が手を挙げる。)

豊太 「先生」

青島 「なんや松崎」

豊太 「日本は四民平等になったと言やりましたけど、わし、ほんまは違うと思います。」

青島 「違うというと？」

豊太 「皇族、華族、士族、平民と今でも4つに別れてます。」

青島 「皇族さまや華族さまは別のお方や」

豊太 「わし、なんやら、さっぱりわかりませんわ」

(豊太、おおげさに頭をかく。子どもたちどっと笑う。)

青島 「静かに！」

(もっていた棒で机をピシりとたたく。)

青島 「終わる」

(生徒①が号令をかける。)

生徒① 「起立、令、着席」

(青島先生は退場し、生徒たちは掃除を始める。バケツを持った孝二のところへ民吉と貞夫が近づき話を始める。)

貞夫 「孝やん、あんなむずかし文句、よう覚えたなあ」

孝二 「あんなもん、覚えんでええんじゃ」

貞夫 「なんで？」

孝二 「あんなもん覚えたかてしやあない」

民吉 「なんでしやあないん？試験に出るかもわからんで」

(いつも間にか、青島先生が後ろに立っている。)

青島 「そうや。なんでしやあないんか、先生にも聞かせてもらおうか」

(孝二、カラのバケツをさげて青島を見る。)

青島 「バケツをおけ」

(孝二、バケツを降ろす。)

青島 「なんで『五箇条の御誓文』を覚えてもしやあないんや」

孝二 「……」

青島 「わけが言えんのかこら！」

孝二 「先生。わしらは『新平民』や！『五箇条の御誓文』をなんぼまる暗記できても、『新平民』はなおりません！」

青島 「そうか、おまえはそない新平民がいやか、もとの身分の方がええのか！おそれ多くも天皇陛下さまが(興奮してくる)、天皇陛下さまがせっかく新平民に引き上げてくださったのに、ありがたいと思わんのか、このバチ当たり！」

(孝二、つきとばされて倒れる。)(幕が閉まる)

※

ナレーション (BGM 解放歌)

① 最も民主的な場所 でなければならぬ学校においても、平然と差別が繰り返された時代、教師が差別をしてきた時代があります。そんな差別の中を苦しみながらも、くやしい思いをしな

がらも、孝二、民吉、貞夫たちはひたむきに生き、ひたむきに働き、立派に成長していきます。

② 場面は、立派に成長した3人が、厳しい仕事の中でも、最も楽しみにしていた祇園祭りの日

を迎え、その祇園祭りに行く前に「えびす湯」という風呂屋に向かう時の会話から始まります。

(幕が開く)

※

二 場 えびす湯にて

貞夫 「なんや一わくわくするのお、もう太鼓が聞こえてきよるでえ。」

民吉 「貞やんは、もうひと月もまえから太鼓太鼓で、な一、うるそうてかなんな一。」

貞夫 「なにい、民やんかて昨日はうれして寝れなんだて、ゆうとったやないけ、なあ、孝やん」

民吉 「そら ちがうがな、昨日はやることがあつたさかい……、そない笑いなや、孝やん」

孝二 「笑うとらんで。(笑)祇園さんじゃ、うれしいのはあたりまえや。ご主人はんも屋からひまくれたしな」



貞夫 「せやせや、いっつも足が短うなるほどすわりっぱなしで草履あみよるんやで。祇園さん
くらいはなア」

民吉 「日いのあるうちにひとつぶろ浴びて、な」（貞夫を見る）

貞夫 「気持ちよおなってから神さん拝みにいって、な」（民吉を見る）

貞夫・民吉 「わしら、昨日から決めとってんなー」（二人肩を組んでうれしそうに）

孝二 「（笑）」

民吉 「あー、やっぱ孝やん笑いよる。孝やんかてうれしくせに、もー……」

孝二 「民やん、着いたでえ。（笑）」

貞夫 「『えびす湯』や、こーんにちは、お願いしまさー」

番台女 「はい、おいでやすー。あ、（顔色を変える。）ちよいと、あんた」
（女、手まねきで男を呼んでコソコソ話す。）

番台女 「わかれへんとでも思うとるんやろか。ねえ。ほんまに最近はお森のもんも大けな顔し
て。あんた、言うてやって」

番台男 「おまえら、きょうは祇園さんやな。みなはん、神様詣りの前に風呂に入りきやはる。
あいでも日のあるうちに来てもろてはどうもならぬのに、ましてこんな日に、おまえら小
森のもんに先に入られては、他のお客さんがえらい迷惑や。せやからな、あいと同じにし
まい風呂に來い。そしたら入れたる」

貞夫 「なんやて。」

民吉 「貞やん、いの。」（民吉、貞夫の
袖を引っ張る。貞夫、振り払って）

貞夫 「言うてくれるやないけ。そねんな
らそねんと、『日いのあるうちは、
小森お断わり』で張り紙でもしとつ
たらええやないか。」

番台男 「なに、やさしゅうに言うとりや、
つけあがって！」

番台女 「ほほほ、笑わしてくれるやない
の。……あんたら、張り紙の字い。
読めたんけ。ああ驚いた。」

貞夫 「（握り締めたこぶしを振るわせて）
こ、孝やんは読めるで」

孝二 「貞やん！」

番台男 「読めんのけ？読めんのけ！小森のもんは大人も子どもも、学校休むことなんか、屈え
とも思うとらぬよつてに、でかい図体して、字も読めぬのよ。（キツとして）字いも読め
ぬものが大けな口たたいとらぬと、さっさと帰らぬかい！」

佐山 「どうしたどうした、えびす湯はん。なんや、表まで聞こえとるがな。」

番台男 「あ、こらま、佐山のだんな、よう、おこしやす。いえね、小森のやつらが、昼間っか
ら、風呂入らせてくれ言いまんね。うちとしても、そねんなこといわれても、へへ、困り
ますさかいになあ……」

佐山 「そりゃあ、えびす湯はん、（間をおいて）あんさんの方が大人気ないぞ、知ってのと
おり明治4年にはおそれおおくも天皇陛下が解放令を発令あそばされちよる。もう小森のも
んも町のもんといっしょやということや。特別扱いしたら、あかぬで。これからは仲よう
にしていかねばあかぬようになったのやで。」

番台男 「へえ……」



佐山 「（振り向いて）と、いうことや。ええか、おまえらのようなやつを、平民にかぞえてくだりはました天皇陛下様のように感謝したてまつって、一日もはようみんなにきらわれんようになるのやぞ。だいたい、くさり目をして、くさい身体をさげてのこの町に出て来たら、風呂屋でのうてもことわられるのがあたりまえや。小森のもんは、どうも不潔でいかん。ように毎日手も洗うて、洗濯もして、それから、行儀もようにすることや。えびす湯はん。あんたの心配もわからんでないが、小森のもんも、風呂にはいれず困つとる。困つとるもんをいたわるのが、人の世の情けちゆうもんや。どや、このわしに免じて、入れてやってもらえんかの。」

番台男 「へえ……、そらもう、あの、佐山のだんなのおっしやることやったら……。」

孝二 「貞やん。」

（うつむいている貞夫に声をかける。貞夫、我に返って言う。）

貞夫 「孝やん、わし、いぬわ。」（孝二を見、外に飛び出す。）

孝二 「貞やん！……民やん、ほら、」

（泣きそうな顔の民吉を促して、『えびす湯』を出る。）

番台男 「なんや、あれ、せつかく佐山のだんなが、ねえ。」

佐山 「ううむ、礼儀を知らぬやつらや。これではのお。」

（番台男・女、顔を見合わせて、うなづく。）

孝二 「貞やん！……。どこ行てもうたんやろ。……民やん、もう泣きなや。……民やん、そや、これから祇園さん行こうで。貞やんも、行つとるかもしれへんし……。」

民吉 「『みなはん、神様詣りの前に風呂に入りきやはる』いうとつたワ。こんなこぎたないからだでお参りしたら、神さんにまで嫌われてしまうがな……。」

孝二 「民やん、そんな……。」

民吉 「字も読めん。体は汚い。なんで小森に生まれてきたんかのお。……ごめん、孝やん、わし、きょうは帰るわ。かんにんな。」（退場）

孝二 「民やん！」

孝二独白 「民やん、違う。なんやわからんが、ちがうんや。ちがう、間違うとる。ぜつたい、全部、なんもかんも間違うとる、違うんや！」（幕が閉まる）

※

ナレーション（BGM 解放歌）

① 孝二、民吉、貞夫の3人が祇園祭りにいくために立ち寄った「えびす湯」。そのえびす湯で受けた屈辱的な扱い。そんな中でいつけん自分たちに同情してくれているかのように間に入ってきた佐山。その佐山に対してもこみ上げてくる怒り。

② どうしてこんなにばかにされないかんのかと、やけを起こして飛び出した貞夫。無気力になって帰ってしまった民吉。そして孝二は何かの間違いに気づいていきますが、それが何なのかはまだわかりません。

① それから1日が過ぎますが、貞夫はどうとう帰ってきませんでした。そんな状況の中で、孝二の家に和尚さんがきました。場面は孝二の家につります。（幕が開く）

※

三 場 孝二の家

和尚 「のお、行ってくれぬか。孝二くんやったら大阪で迷子になる心配もないし。むろん、費用は村から出るさかい、その点は、心配いらぬのや。なにせ、『大日本平等会』の創立大会やからなあ。」

孝二 「おっしよはん。だいたいその『大日本平等会』ていうのは、なんなんだつか。」

和尚 「まア、わしや、町の佐山のだんはんが進めとる大和公道会みたいなもんでな、部落をよ

うして、一般の人と仲ようできるようにしていこうちゅう会や。わしらの小森部落からも有能な青年を是非参加させるようにと言うてきてくだはってな。孝二さんと、誰かもう一人頼むつもりや。」

孝二 「佐山のだんはんみたいな考え方した会だっか。……しばらく考えさせてもらえまへんか」
和尚 「まあ、まだ日はあるさかい、ように考えてや。(おふでの方を向いて) どうも夜分に失礼しました。孝二さん、それじゃ、頼みましたで。」

おふで 「どうもわざわざ。おかまいもできしまへんで。」

孝二 「お気をつけて。おやすみなさい。」

おふで 「安養寺のおっしょうはん、小森のためにいつも御苦労はんやな」

孝二 「ん、ほんまに……。」

おふで 「孝二？」

孝二 「ん……。」

おふで 「孝二、貞夫はん、心配なこっちゃな。」

孝二 「んん？いや、おかあはん、あいつのことやから、大事なデ。それより、もう遅いからしまわんネ。明日も早いし。」

おふで 「せやな。……せやけど、仕事場にも来てないちゅうんは、おかしいなあ」

孝二 「んー……、せやなあ……。」

おかね 「こんばんは暑いなあ、おふではん。おや、孝やん、いつも親孝行で、おふではんも安心なこっちゃな。ところでなあ、(声を落として) 聞いたけ、松波んとこの貞やんな、きのう、警察につかまって、留置所に入っとつたらしで。」

おふで 「そら、ほんまだっか。」

孝二 「どうして！」

おかね 「なんやの、孝やん、こわい顔、へっ(得意そうに) 知らんかったんやなあ。なんやきのうの祇園さんでな神さんのねきの出店こわしてあべれたらしで。」

孝二独白 「貞やん……！」

おかね 「ほんまにあほなことしてくれるわ、そねんなことするさかい、小森のもんはこわいやのなんの、いわれるネ。(このあたりから、貞夫登場、おかねの後ろに立っている。おかね、気づかず、話す。) えらい迷惑な話や。だいたいあのあほたれ息子が……。」

おふで 「貞夫はん、こんばんは。」

おかね 「ああ？ええっと、わしは、そうや(手を打って)、あしたも早いさかいなあ、もう、うち帰って寝よ、ふああ、急に眠とうなつた、これはたいへん、ほなら、おふではん、おやすみなさい。ああ、びっくりした。」(おふで家の中に入る)

孝二 「貞やん！」

貞夫 「孝やん、わし……。」

孝二 「貞やん、心配したで。」

貞夫 「(しばし、涙をこらえる。) わし、孝やんにだけは聞いてほしいんや。わし、あれからてぬぐいとシャボン持ったまんま祇園さん行つた。けど、何を見たかて、何を食うたかて、そんなン、うまいことも面白いこともあるかい。それで酒を飲んで、祇園さんの屋根に石投げて、屋台けたおしてやったんや。(間) わしはなにも暴れるのが好きで暴れたんやな



いネ、わしはあの時、暴れぬでは、わしというものが、消えてのうなりそうな気がしたんや。」

(貞夫、孝二を見る。孝二、二三度うなずく。)

貞夫 「なあ、孝やん。えびす湯にだけやないネ。わしはあの佐山のやつにも、なんや、むかむか腹が立ってかななかったんや。けど、理屈でけんかしたかて、勝てるわけないネ。わし、何にむかむかするのやら、自分にさえわからぬのやさかい。それでもな、わしは、何かが間違うとると思うんや、孝やん、わし、おかしやろうか。」

孝二 「おかしない、おかしないで、貞やん。いっしょに行こう。大阪や、平等会や。そうや、何かが間違うとる。わしらはそれを確かめに行くんや。」(幕が閉まる)

※

ナレーション (BGM 解放歌)

① 貞夫の話聞いた孝二は、貞夫といっしょに平等会に行くことを決心しました。

② 舞台は、大阪、大日本平等会の創立大会の会場へとうつります。(幕が開く)

※

四 場 大日本平等会創立大会 大阪

孝二 「だいぶ集まっとるなア。どこに座る？」

貞夫 「孝やん、あそこ、空いとるで。(二人座る)よっこらしよ、ちょうど二つ空いとってよかったな。」

孝二 「始まるで。」

司会者 「ただいまより、大日本平等会創立大会を開会致します！会長あいさつ！」

会長 「みなさん遠いところを、ようこそおこしくございました。たった今、大日本平等会が発足致しました。さて、みなさん、この節の乱れた世の中を眺めます時に、世の中でつくづく大切なのは、それぞれの区別・順序をはつきりと整えることであるといえましょう。いえ、もちろんそれは、上の者が下の者にいばるといことではありません。それは、わが平等会が最も嫌うところのものです。私が申しますのは、年上は年下を教え諭し、力強き男はか弱き女をかばい、金持ちは貧乏なものを助けてやる、そういうことでございます。そして、それと同様に、これからわれわれ一般の者は、部落の人々を、あわれみ、いたわりたいと思います。ですから、部落のみなさんも、どうぞ遠慮なさらないでください。そうして解放令に感謝し、ますます天皇陛下に忠義をつくしてください。一般の人々と部落の人々が仲よく融和していくことこそ、陛下の御心であり、また、わが大日本平等会の望みでもあるのです。以上、簡単ではございますが、あいさつに代えさせていただきます。」(聴衆は、近くの人にコソコソ耳打ちしたり、うなずき合ったりして、不満そうにする。)

貞夫 「んー、孝やん、なんや、わし、またこのへんが(胸を押さえる)むかむかしてきたでえ」

孝二 「うん、そう思うとるのはわしだけやなさそうやな。」

(次のセリフは、前の人のセリフが終わる前に次々と言う。また、①～⑨以外の人も適当に隣の人などと文句を言い合う。)

聴衆① 「あほぬかせ！」

聴衆② 「うちらそんな寝言が聞きとって、はるばる美濃から来たんやないで」

聴衆③ 「ええかげんなことぬかすな！」

聴衆④ 「せやせや！」

聴衆⑤ 「わしらが紀州から出てきたんはな」

聴衆⑥ 「ほんま、わしらつらい思いしよんじゃ！」

聴衆⑦ 「そのことがわからんのか！」

聴衆⑧ 「腹立つのお。ほんまに！」

平等会の男① 「おい、静かにせぬかい」

(壇上から立ち上がって)

聴衆⑨ 「静かにすることないわ」

聴衆⑩ 「もうええわい！」

聴衆⑪ 「たいがいにさらせ！」

司会者 「お静かに、お静かに！皆さん、これからは皆さんの意見発表の会でありますから、どうか意見のある方は、ご遠慮なく舞台の上にお上がりください。」

(場内静まり返る。一人の男が舞台に駆け上がる。みんな注目。)

西光万吉 「みなさん、聞いてください。」(壇上へ駆け上がりながら)

西光万吉 「只今、平等会の趣旨を伺いましたが、私は残念ながら、それに賛同しかねるものです。皆さんもご存じのとおり、この平等会をはじめ、今まで多くの人々が、部落の状態に同情し、部落の改善を叫んできました。けれども、もし改善すべきものがあるとしたら、それは私たち特殊部落ではなくて私たち三百万の人間を『特殊』な存在とみなしている社会そのものではありませんまいか。私たちは特殊ではありません。それを『あいつらは人間ではない、エタだ、カワタだ』そういつて差別し、圧迫を加えて貧困のどん底につきおとし、とうとう『特殊』にしてしまったのは、実に社会そのものではありませんか。その没道義きわまる社会を、人間的正義の社会に改善することなくして、なぜ私たち三百万人に、人間としての真の幸福がおとずれまじょうか。」(会場から大拍手が起こる)

(ハッとて、顔を上げる者、うなづく者等、感動が場内に広がる。)

聴衆⑫ 「そうだ、その通りだ。」

聴衆⑬ 「そのことが聞きたくてわしらはきたんじゃ！」

聴衆⑭ 「しー！だまって聞け。」

聴衆⑮ 「みなさん、静かに、静かに」
(立ち上がっていう)

(お互いに注意し合ってスーッと静かになる)

西光万吉 「私は、特殊部落はみじめだから、あわれだから、また気の毒だからと、あわれみをかけ、同情を寄せ、改善を加えるというこれまでの融和運動のやり方は、例えていえば、理由もなく相手をなぐりつけて瀕死の重傷

を負わせておきながら、おまえはみじめだ、あわれだ、気の毒だと言っているのとそっくり同じではないかと思えます。どうしてそんな乱暴者に、どうぞ仲ようお付き合いねがいますと、頭を下げて頼みに行かねばならぬのでしょうか。そのような乱暴を許さないような社会を造ることこそ、先決ではないでしょうか。」

(怒涛のような拍手が沸き起こる。)

聴衆⑯ 「そうだ、その通りなんだ。」

聴衆⑰ 「わしらはどうして差別されるんじゃ」

西光万吉 「私たちは貧乏のゆえに、ますます厳しく差別されます。貧乏ゆえに、われわれの中には、小さいころから学校へ行くこともかなわず、朝から晩まで働いてきた者が少なくありません。そのために、字が読めないからといって、それがわれわれ自身のせいでありま



しょうか。われわれは、なぜ貧しいのか。それは、職業の自由がないからであります。私たちは団結して、まず、職業の自由を社会に要求しなければなりません。そうです、上からの同情では何も解決しないのです。必要なのは、我々自身が立ち上がり、団結して闘うことなのです。」（再び大拍手は起こる）

聴衆⑧ 「ようわかる、ほんまにその通りじゃ！」

聴衆⑨ 「わしもそう思う。」

西光万吉 「平等会は部落の人をあわれみ、いたわってくださいとおっしゃる。そんな必要はない。人間は生まれながらにして平等だからです。私たちはみな尊い人間だからです。人間はいたわられるべきものではない。すべての人間は、尊敬されるべきものなのです。この精神に基づきまして、私たちは、このたび『水平社』を組織しました。来月3日、京都の岡崎公会堂で、水平社創立大会を開催する運びとなっております。当日は是非皆さんの御参加を希望するしだいであります。」

（怒涛のような拍手が起こる）

聴衆⑩ 「ええぞ、全くその通りじゃ」

聴衆⑪ 「そうだ、その通りなんだ。」

（その聴衆の頭上にピラが舞う）

水平社の男① 「みなさんの水平社創立大会への参加を待っています。」（ピラをまきながら）

水平社の男② 「私たち自身の手で部落の解放を勝ち取りましょう」（ピラをまきながら）

水平社の男③ 「差別の解消は、踏みつけられてきた私たち自身の行動によってのみ実現するのです。今こそ私たち自身が自らの力で立ち上がる時がきたのです。」

（聴衆の中でピラをまく。みんなピラを取って歓声をあげる。）

聴衆⑫ 「そうだ、おれたちが求めているのはこのことなんだ！」

平等会の男② 「（舞台上から）ピラを捨てろ！ピラを破れ！だまされるな！」

聴衆⑬ 「やかましいわい！」

聴衆⑭ 「ひっこめ！」

聴衆⑮ 「もうお前らにはだまされんぞ！」

（平等会の男の声、拍手と歓声にかき消される。）

靴職人 「聞いてくれ、聞いてくれ。わしは言いたいことがいっぱいある！」

（舞台にかけのぼる。聴衆の拍手はここまで続いて、静かになる。）

靴職人 「わしは靴職人だ。水平社のことは知らぬ。今初めて聞いた。けど菜っ葉服の男が今言うたことは、みんなほんまのことや。わしらには職業の自由がない。それが証拠に役人にもなれぬし、兵隊でも出世はできぬ、戸籍にも兵隊の身上書にも、わしらの名前の上には『新平民』の『特殊部落』のと書いたるわい。そんな差別をしておきながら、ますます忠義を尽くしなさいと、いくらなんでも言えた義理か。平等会のやつら、どこまでわしらをあほにさらすつもりや。だけど、もうあかぬど、ほんまのことを知ったからには、3月3日の水平社創立大会には、何がなんでも駆け付ける。刀が降ったらその刀をつかんで、やりが降ったらそのやりをつかんで駆け付ける。3月3日ばんざーい。水平社ばんざーい！」

聴衆⑯ 「水平社ばんざーい」

全員 「ばんざーい、ばんざーい！」（立ち上がって叫ぶ。ピラを振る。）

貞夫 「（会場に向かって）孝やん、水平社ばんざいや。わしが字習えんかったんは、わしのせいやなかってんな。そうや、わし、学校休んで遊んどったんやない。わし、ちんまいころからずうっと、一生懸命働いてきたんや。わし、わし……………」（男泣きに泣く）

孝二 「貞やん、わしはずっと、部落に生まれてきたことを、うらんどった。恥ずかしかった。けど今は、今は誇らしい！この熱い思いはわしらのもんや。人間は平等や。わしらが一番

よう知つとる。……………夜明けや。わしらに初めて朝がくる。」（幕が閉まる）

※

ナレーション（BGM 解放奨学生の歌）

- ① この大日本平等会の10日後、1922年（大正11年）3月3日、京都・岡崎公会堂で開かれた『全国水平社創立大会』には、全国各地から人々が集まりました。
- ② 翌日の大阪朝日新聞は、『出席者2千人に及び、多数の女性もまじってすこぶる盛況で宣言を決議』と伝えています。
- ③ 最後に日本の人権宣言とも言うべき水平社宣言をクラス全員で朗読してこの劇を終わりたいと思います。

宣言朗読（クラス全員でゆっくりはっきりと訴えるように）

- ④ 私たちはこれからの全体学習を通して、この宣言の奥に流れる崇高な理想をしっかりと学んでいきたいと思います。以上で3年A組の人権劇『水平社バンザイ』を終わります。礼。

※

《水平社宣言は生きる勇気を与えてくれる》

今日は劇の本番でした。みんないつもよりものすごくよかったですと思います。今までで最高だったと思います。バンザイもすごかったです。みんなの大きな声に胸がいっぱいになりました。私たちの後ろで河野先生や一郎先生もとかも大きな声でバンザイをしていました。

今日やった劇の喜びはずっと忘れないと思います。最後にみんなで宣言文を読んでいるとき、大きな声を出していたら心の中がすっきりした感じになりました。あの水平社宣言には、私たちの心を豊かにし、生きる勇気を与えてくれるような力があります。

※

《この感動を愛媛県にも伝えて、私たちも皆さんと共に頑張ります》

今日劇をする前ものすごくドキドキしました。劇が始まる直前まで自分の台詞を何度も読み直しました。今まで一生懸命してきたからどんなことがあっても失敗したくありませんでした。舞台裏でえびす湯の場面を見ていて、3人が肩を組んでいるのを見て笑ってしまいました。でもそれで緊張が取れました。自分の場面がきて幕が開くのを待っているときに、一番緊張しました。緊張し過ぎて唾を飲み込んだ音がマイクに入ってしまい、しゃべるとき「ゴクッ」と聞こえてしまいました。

自分の場面が終わり最後の場面で、山本君（西光万吉）と鈴木君（靴職人）が訴えている言葉には、熱いものがこみ上げてきました。今日は二人ともすごく力が入っていたので、二人の言葉に聞き入っていました。そして、みんなで「バンザイ思いきりしような！」と声を掛け合い、思いきりバンザイをして、私はもう「成功した」と思ってしまう、まだ西村君と小川君の台詞があるのに、もう舞い上がって頂点に達していたので、それも忘れてしまいうちに椅子を持ち、舞台上がろうと立ち上がってしまいました。

「もう、あかん」と思ったけど、その分、宣言文を思いきり読みました。大きな声を出していたので息をするのが大変でした。先生が終わった後、「最高じゃ！」と言ってくれてものすごくうれしかったです。私は少し失



敗したけど、「精一杯頑張った！」といううれしさの方が大きかったです。劇が終わって着替えをしているときに、愛媛県からおいでた一人の先生が「すばらしい演劇ありがとうございました。これらも差別解消のために頑張らしましょう。」と言ってくれ、もう一人の先生が「皆さんの学習に対する熱が伝わってきました。この感動を愛媛県にも伝えて、私たちも皆さんと共に頑張ります。」と言ってくれました。本当に劇をしてよかったです。帰りもまだ熱い感じが抜けきらずに落ち着きませんでした。

※

《自分たちで実際に演じてその人物になり切った》

3年A組の仲間全員で演じた人権劇「水平社バンザイ」は、今までの学校行事の中で一番心に残っている。全体学習やクラスでの同和問題学習のように話し合っていくこともとても大切だと思うけど、自分たちで実際に演じてその人物になり切ることによって、間違っていることや正しいことを肌で感じるができると思う。本番の舞台が開くまでの緊張感や幕が閉じたときのさわやかな感動、そんな思いが差別解消への確かな生き方を生んでいくんだと思う。

最後にみんなで水平社宣言を朗読したときの思い、あの鳥肌が立つような感動は決して忘れないと思う。そして幕が降りていくときに沸き起こった会場の拍手も、いつまでも私たちの心の中で響いていくと思う。私たちの劇を見て心に何かを残してくれた人、何かに気付いてくれた人が一人でも多くいてほしい。私たちはだれかを変えれたと思う。そう信じたい。

※

《みんな一人一人が自分の役を立派にやり遂げた》

多くの人のいる中で「水平社バンザイ」を演じて、僕自身としては最高の出来だったと思う。このシナリオをもらったのが夏休みの後半で、初めてシナリオを見たときは長い台詞に驚きこんな劇やれるのかという思いがあった。たぶんみんなもそう思っていたと思う。そんな不安の中でまず文化祭に向けて取り組んだ。文化祭では失敗したところもあったけど、自分なりに満足のいくものだった。そして、この町民センターで劇をすることが決まってからまたクラス全体が頑張ろうとしていった。いろいろなことを考え、何度もやり直しながらついに本番の日がやってきた。みんなで町民センターに行ったけど、いつもと変わりはない。練習通りやればいい、別の緊張することはない。そう思っていた。何人の人が見ていようが何も恐れることはないと思っていた。僕たちは自信に満ち溢れていた。いよいよ本番、幕が揚がって多くの顔が見えた。余計にやる気が出てくる気分だった。僕自身にしても劇全体にしても、今までで最高の出来だった。宣言文を思いきり読んだ。みんな大満足だった。これでこそA組だと思った。みんな一人一人が自分の役を立派にやり遂げた。

※

《僕は板野中学校にきて本当によかった》

本当のみんなで劇ができてよかった。何か自分の気持ちをみんなにわかってもらえたような気がします。考えるだけだったら誰でもできます。けど3年A組のみんなは自分自身の思いを劇にして表現しました。最初はすごく緊張して口が結構震えました。前の日まで台詞をちゃんと覚えなかったのですごく不安でした。でも舞台の上に立ったら、もうとにかく頑張ろうという思いでいっぱいでした。西村君や圓藤君とも気が合ってうまく行って最初から結構いい感じでした。自分でもすごくいい劇ができたと思います。

今まで全体学習や学級での同和問題学習に頑張ってきたけど、本当にすごくうれしいです。この板野中学校の転校して来なかったら、こんなすごいことはできなかったと思うので、僕は板野中学校にきて本当によかったと思っています。この劇は自分の自信になったような気がします。このクラスのみんなはたぶん僕と同じだと思います。この思いを勉強の方に向けて頑張っていきたいと思います。これからいくつもの峠があると思います。けど自分はやる気になったらできる

と思っているので、もっと自分を厳しい状況において頑張っていこうと思います。

※

《当時の被差別部落の人たちの苦しみを訴えることができた》

2回目の公開となった「水平社バンザイ」の劇では一段と考えさせられるものがあった。文化祭のときとはまた一味違って、これまでよりすばらしいものに仕上がったと思います。この劇を通じて私はより一層自分というものが大きくなったような気がします。これからはいくつかの差別と出会うかもしれないけど、この3年A組の教室で学んだ様々なことを今一度思い返してこれからの人生に生かしていこうと思います。

私は聴衆として短い台詞をポツリポツリしか言わなかったけど、当時の被差別部落の人たちの苦しみを訴えることができたのではないかと思います。夏休みにシナリオを手渡されたとき、あまり乗り気でなかったけど、そんな私がいつも間にか頑張ろうとする私に変わっていました。文化祭だけしかこの劇を演じることはないと思っていたけど、このように再び演じることができてよかったです。私の心の中には文化祭と町民センターでやったあの劇の一つ一つの場面が焼き付いています。ドキドキしながら台詞を吐き出したけど、それ以上の熱い思いをみんなと分かち合うことができたと思います。この調子で入試も乗り越えたいです。

※

《人を感動させることが私たちにはできるんだ》

私はこの「水平社バンザイ」をしてよかった。一生懸命してよかったと思った。するときはものすごく緊張していたけど、終わってみるとすごく気持ちがよかったです。バンザイとか拍手とかをするとき、後ろから大きな声や拍手の音が聞こえてきたのでうれしかったです。私は特に一郎先生の声がよく聞こえました。

私は3Aのみんなと一緒に緊張しているのをほぐして声を掛け合いながら、一生懸命この劇をすることがうれしかったです。本当に3Aの仲間やなあという気持ちがしました。うまく言えないけどすごくあったかいという感じがしました。

本当にいいなあと思いました。3Aになってこの劇をしなかったらこんな感動を感じることはなかったと思います。劇が終わったとき二人の先生が言ってくれた言葉はものすごくうれしかったです。

今日の数学の時間、山口先生も「感動した」と言ってくれました。私はそんなに出番はなかったけど、人を感動させることが私たちにはできるんだと思いました。本当に劇をしてよかったと思います。そして、会場にきていた人たちにこれで考えてもらえたらもっとうれしいです。3Aの絆は本当にすごいです。この劇の経験を生かしてこれからももっと一生懸命に頑張りたいと思います。

※

《いつになっても忘れられないものになると思う》

いよいよ劇の本番でした。文化祭のときより、今までの練習のときより、一番いい劇になったと思います。一つ一つの場面ごとにみんなが一生懸命だったと思うし、応援していました。大日本平等会創立大会の場面での史ちゃんの会長や、山本君の西光万吉の台詞、鈴木君の靴職人の台

詞にも、すごく力が入っていてよかったと思います。えびす湯の場面でいろんなアドリブが入ったりしてすごくわかりやすかったしよかったです。一人一人の役も孝二は河野君や西村君だからできただろうし、貞夫ならそれなりに宮本君や小川君であったからできたんじゃないかって思います。

水平社バンザイのときのバンザイっていうのも、ものすごく思いきりできてうれしかったです。それに町民センターにきて劇を見てくれた人たちが一緒にやってくれたこともうれしかったです。それは宣言文も同じで、みんなが大きな声で力いっぱい気持ちを込めて宣言できたと思います。劇が終わってみんなで写真を取ったときも、一生懸命頑張って演じたことも、練習したことも、いろんなことを含めて全部、いつになっても忘れられないものになると思います。

※

《みんなが心を一つにして一つの目標に向かっていく》

始めはそんなに緊張してなかったけど、いざマイクを持つとドキドキしました。短い台詞だけど忘れてたり、間違ったらどうしようと思うと小川君や園藤君、西村君はなんかいつもよりうまくてわかりやすかったと思います。私も台詞を間違えずに言えたのでよかったなあと思いました。それと最後の宣言とバンザイは今までの中で一番大きな声を張り上げて言いました。みんな「バンザイ頑張ろうな」って声を掛け合っていたし、みんなが大声でバンザイするって思っていたか言えたと思います。この劇が終わったとき私は本当のこの劇をやったなあと思いました。この劇を通じてみんなといろいろ話し合えたし、絆というものができたと思います。私はこの劇をしたことを一生の思い出としていくと思います。それにあの劇が終わったとき、ものすごい感動がこみ上げてきました。やっぱりみんなが心を一つにして何か一つのものに向かっていくのっていいなあと感じました。本当のこの劇をやったなあと思います。

※

《答辞の言葉の一つ一つを自分のものとして捉えることができた》

私自身、文化祭のときの劇は自分の台詞が自分のものにならず余り納得のいくものではなかったので、あの劇をもう1回やれると聞いて、今度は自分の台詞を自分のものにしようと思いました。本番では心臓の音がみんなに聞こえるぐらい鳴っていて、台詞を自分のものとして言えたとき、私の心の中にはこみ上げてくるものがありました。

先輩たちが残してくれた卒業式の答辞、私にとってあの答辞を読むに当たって私の思いを精一杯込めて読んでいきました。私はやっと答辞の言葉の一つ一つを自分のものとして捉えることができた12月7日を一生忘れないと思います。そして何より今までで最高の劇をクラスみんなと共にやれたことがうれしいし、あの劇を見て私たちの思いを受け止めてくれた大勢の人たちに感謝しています。「水平社バンザイ」は私の中の一生の宝物になりました。

※

人権劇への生徒の思いは本当にすごいものがあつた。その感動を確かめるために、人権劇への思いを語り合う授業を実施した。その授業後の感想をまとめておきたい

※

《みんなのさわやかな笑顔がよみがえってきた》

この前の劇を演じた思いについて、クラスみんなで話し合いをした。あの授業も劇と同じように忘れられないものになりそうです。劇が終わって幕がしまった瞬間、みんなの顔がさわやかな笑顔に変わった場面がよみがえってきました。新鮮な気持ちというのはあの思いをいうのだろうと思います。

※

《みんなのひきつった顔が一瞬にして笑顔に変わった》

今日の道徳の授業、ビデオにとったけど、みんな緊張してなくて劇のことを楽しく話してくれ

ました。今日の授業で心に残ったのは、矢野さんの思いです。

「最終の幕がしまつて、みんなの拍手が聞こえたとき、A組のみんなのひきつった顔がいつせいに笑いに変わった。あの瞬間を私は一生忘れないと思う。」

まさしくその通りでした。あのとき、本当にみんなのひきつった顔が一瞬にして笑顔に変わりました。私は晶子ちゃんの思いをずっと覚えていたいです。

※

《これからの人生を生きていく誇りとなっていく》

今日の5時間目の道徳の時間に、劇の感想なんかをいうことになってビデオをとっていました。田尾さんや鈴木君が言っていたおじいちゃんのことだけど、私もそのおじいちゃんにつかまっていろいろ話をされました。「1回ぐらいこんなことしたって差別やなくなれへん」とか。「今の日本は何もかもお金で解決しよる」とか。いろいろ聞かされました。ムツとしたけど、おじいちゃんが言いたかったことは何となくわかるような気がします。

劇の配役のことで、圓藤君も言っていたけど、私もみんな一人一人にすごくその役があつていて、それ以上はないと思う。1の場面のところも、青島先生が野崎君だったからあの教室の雰囲気伝わり、孝二が河野君で、民吉が長尾君で、貞夫が宮本君で、松崎が井上君だったから、あの感じが出せたと思うし、河野君が孝二の気持ちを考えて演じていたというのを知ってすごいと思いました。

2のえびす湯の場面では、孝二が西村君で、民吉が圓藤君で、貞夫が小川君だったからこそ、自然な感じになってすごくよかったし、番台男が吉田君で、番台女が平野さんで、佐山が松長君だったからこそよかったと思います。

場面3は孝二の家でした。坂東君の衣装がすごかったです。それに坂東君が和尚だったからよかったんだと思うし、おふでが多田さんで、おかねが手塚さんだったからできたと思います。

最後の場面では、長い台詞だった会長役、西光万吉役、靴職人役が、森川さん、山本君、鈴木君だったから、あんなに感動的なものになったと思うし、司会者が田尾さんで、平等会の男が村田君と郡さんで、水平社の男が佐野君と佐藤君と中村君で、聴衆が福原さん、由美子ちゃん、長尾さん、小林さん、智代ちゃん、中川さん、矢野さん、三藤さん、私で、山田さんが来れなかったのはさみしかったけど、みんな一人一人の台詞を精一杯に訴えたとします。そして、ナレーターが静ちゃんと美里ちゃん、監督が先生だったからこそ成り立った劇だと思いました。

私は（みんなもそうだと思うけど）一つの場面ごとにドキドキしながら、一つの劇をみんなで演じているということが楽しくて嬉しくてしかたがなくて、そんな中でこの劇をみんなで演じて、最後に宣言文を読んだときは本当に胸がいっぱいでした。あの全員でした宣言の朗読は、私たちのこれからの人生を生きていく誇りとなっていくと思います。

繰り返し繰り返しみんなと宣言を読んでいく中で、いつの間にか宣言を覚えていたことがすごくうれしくて、たぶん絶対いつになっても忘れんと思います。

今日の私の生活ノート、3 A36人全員出場しました。なんだかとてもうれしい。

